放射性ヨード摂取率が測定できない際の両者の鑑別に有用であると考えられる.

12. 甲状腺未分化癌12例の検討

早野　敏郎　太田　淑子　吉岡　明子
田中富美子　近藤　千里　牧　正子
廣江　道昭　日下部きよ子　(東女医大・放)

過去6年間に当科で核医学検査を施行した甲状腺未分化癌12例について検討した. 12例中男性5例, 女性7例, 年齢は53歳から81歳にわたり, 平均66.8歳であった. 症状としては全例で急速に増大する頸部腫瘤を認めたほか, 嗄声41%, 嚥下困難33%また全身症状として体重減少が41%で認められた. また12例中5例で, 8年から40年にわたる甲状腺腫の既往を持っていた. 組織診断では, 未分化癌と乳頭腺癌の合併7例, 未分化癌と濾胞腺癌の合併2例, 未分化癌のみ3例と, 大部分が分化型甲状腺癌との合併例であった. ^{67}Ga-citrateによる腫瘍シンチグラフは, 放射線治療開始直後に検査が施行された6例中3例で局所に軽度から中等度の取り込みを認めた. 転移の認められた3例では全例に転移巣に一致した取り込みを認めた. ^{201}Tl chloride腫瘍シンチグラフでは, ^{67}Gaと異なった分布で取り込みを認め, それぞれ^{201}Tlと^{67}Gaによる腫瘍シンチは, 診断および経過観察に有用と考えられた.

13. 甲状腺機能亢進症の^{131}I治療

清水わか子　今関　恵子　村上　康二
安西　好美　吉川　京燦　宇野　公一
三好　武美　有水　昇　(千葉大・放)
堀田とし子　(国立習志野病院・放)
国安　芳夫　(帝京大・放)

われわれが昭和50年から昭和62年の13年間に行った甲状腺機能亢進症に対する^{131}I-ヨード治療135例について^{131}Iの投与方法を検討した. 22歳～67歳の女子112例, 男子23例について予定投与線量を6,000 radとし診断時の有効半減期を5日と設定したところ, 診断時の甲状腺の^{131}I-ヨード24時間摂取率75±13%と差を認めなかった. 治療時に測定した有効半減期は5.5日±1.4日と設定値に対して約10%の延長を認め, Quimbyの式より計算された照射線量は平均で6,460 radであった. これは, 有効半減期の延長によるものと思われる. 今後, 照射線量を予定線量に近づけるためには, 診断時の有効半減期の測定または設定有効半減期の延長を検討する必要がある.

14. 体外衝撃波腎結石破砕術前後の腎機能評価

村田　啓　松田　宏史　(虎の門病院・放)
横山　正夫　柳沢　良三　(同・泌)
大竹　英二　(東京専売病院・放)

体外衝撃波砕石術(ESWL)による尿路結石治療前後における腎機能をRIレノグラフィーにより評価した.

47症例についてESWL前後にTc-99m DTPAレノグラフィーを行い腎の経時画像, レノグラム, 因子分析の結果をもとに, 衝撃波による腎障害の有無, 砕石後の腎機能の改善について検討した. ESWL 24時間後に検査した10例中, 腎腫大や腎実質のRI停滞が出現し衝撃波による腎障害が示唆されたものが4例あったが, これらの所見は短期間に消失し, 急性可逆性の変化と思われた. 結石による機能障害の砕石後の回復に関しては, 術後1週以内に腎機能の改善をみた例は少なかった. 1か月以降では著明な改善をみる例が多くなるがなお機能低下を残し3か月以後に回復する例もあり, ESWLの効果判定にはある程度期間をおく必要があると思われた. RIレノグラフィーはESWL後の詳細な腎機能の経過観察に有用であった.

15. 腎血管障害例での核医学的検討

呉　幹純　頴川　晋　藤野　淡人
池田　滋　石橋　晃　(北里大・泌)
石井　勝巳　中沢　圭治　依田　一重
(同・放)

腎血流障害例における腎シンチグラフィーの臨床的価値について検討したので報告する.

最近, 当施設で経験した腎血管障害例の中の4例, すなわち腎梗塞3例, 腎動脈瘤1例について検討した.

腎シンチグラフィーはすべて^{99m}Tc-DTPAを用いた動態検査にて行い, その一部は試みにHilsonのPerfusion indexを応用して血流動態解析を行った.

その結果, 腎梗塞例では梗塞部分が大きい場合は, そ

Presented by Medical*Online